

ザカート  
「喜捨の新解釈：贈与論的アプローチ」

佐藤秀樹

はじめに

中東世界における経済を語る際、従来より多くの学者は、ことさらにイスラーム世界の特殊性を強調するか、もしくは自分の世界に引き込んで相似性のみを語ってきた。いうまでもなく、その姿勢には、意識的にまた無意識の内にエスノセントリズムが入り込み、容易にオリエンタリズムの枠組みに組み込まれる危険性を孕んでいる。

イスラーム経済は、従来の紋切型の〈知〉のあり様では語れないほどの多様性を内包している。ここ数年の西洋におけるイスラーム社会の無利子銀行の盛んな研究も、無利子という形態の特異性の説明のみに力点が置かれている感がある。無利子銀行の背景にある倫理観、規範、歴史性などは全く無視されているのが現状である。近代経済学という枠組みの中で、イスラーム経済を考察するためには、上述の要素は不必要なものとして、何のためらいもなく切り捨てられてしまいがちである。しかし、主として西洋の経済を解明する「道具」として発展してきた学を、そのままイスラーム世界に転用した際にその有効性をどこまで認めうるかは多くの疑問を残すところである。

本論文では、イスラームの五行のひとつ、ザカート (zakāh, zakāt喜捨)

について考察を行なう。イスラームの無利子銀行が、西洋市場社会の理念と相反するところからこれについてはsecularな面のみが強調されるが、それとは反対に、ザカートについては西洋流の税体系との相似点のみが強調される。そこには、表現方法は違っても、イスラーム本来の姿を偏見なしに理解しようとする態度が欠落している。フォーマリスト（形式的経済学者）は、自国の税体系にこのザカートが近似していることから、疑いもなくザカートを一種の宗教税もしくは富裕税と規定する。経済行為の目的一手段の関係のみを究明する「狭義」の経済学では当然の帰結ではある。これに反し著者は、ザカートは一種の貧者への gift（贈与）であるとの主張を展開したい。このような主張は、無論フォーマリストの立場からは導き出されないものである。

贈与とは古くて新しい問題である。単に「先祖帰り」といった問題でなく、現代社会においても、市場社会の及びにくい農村社会だけでなく、市場社会の真っ只中でも企業間の中元・歳暮などの形で存在している。近代経済学の交換の概念ではとらえられない贈与論は、経済人類学の出発点ともなっている。

サブスタンティビスト（実体主義者）は、「狭義」の経済学の枠組みを飛び越えて、カール・ポランニーが主張するように経済を社会に「埋めこまれた」ものとしてとらえている。ザカートは、その背景にイスラームの倫理を負っている。言い換えるならば、非経済的な要因も経済行為を規定しているのである。本論文では、カール・ポランニー、マルセル・モース、マーシャル・サーリンズらの方法論を援用しながら、ザカートの持つ相互性もしくは互酬性（reciprocity）および共同寄託の側面を明らかにし、より深くイスラーム世界におけるザカートの持つ固有性を浮き彫りにしたい。同時にまた初めての試みとしてイスラーム経済へのサブスタンティビズムの有効性を世に問うものである。

## I. 三つの方法論

### 1. カール・ポランニー

カール・ポランニーの業績は、伝統的な知の枠組みの中では語り得ないほど多岐の分野にわたっている。彼自身ウェーバー、デュルケム、マルクスより影響を受けているものの、ホリスティックなアプローチによる比較経済と経済人類学を確立した。ポランニーは、「経済行動は、社会的、政治的、宗教的生活に編みこまれたもの」と主張する。このスタンスは、ムスリムの経済行為を研究する際、示唆に富むものである。従来より、アダム・スミスから端を発したホモ・エコノミカス（経済人）の前提——つまり人は常に利潤の極大化を目指す——を、そのままイスラーム社会に転用することは真のイスラーム経済を解明する鍵にはならないのではないかと、筆者は疑問を感じてきた。フォーマリストのその姿勢は、経済が社会より「離床」した状態で捉えるもので、イスラーム的価値観は経済行動の評価の対象外となる。むしろ積極的にこの価値観を「埋め戻す」ことによって、イスラーム経済、特にザカートの真の意義を追究することが可能となるであろう。

#### A. 市場経済の特異性

ポランニーの卓抜さは、近代経済学の大前提である市場に対して独自の解釈を試みたことにある。市場経済に必要な不可欠と伝えられてきた貿易、貨幣、市場の三要素について、各々の誕生から発展までを明らかにし、19世紀の資本主義経済の誕生における偶然性を発見する。当時、土地と労働が市場の中に、単なる生産の要素として組み込まれつつあった。ポランニーは、労働の動機として単に収入の増加のためでなく「飢えへの恐怖」からであったと主張する。1834年の英国においてスピナーランド法の改正によって救貧法が改悪された事実が全てを物語っている。ポランニーの著書『大

転換』の訳者である野口建彦氏は、ポランニーは「19世紀の自己調整的市場経済が一見拡大するかのように見えるものの、裏面では労働や土地を疑制商品として取り組み、本来の市場が崩壊していく過程を描いてみせた<sup>2)</sup>」と説明している。

ポランニーの歴史性の読みこみ——特に19世紀の自己調整市場がヨーロッパで成立していく過程を、自明の理として受け入れるのではなく、懐疑的な姿勢で考察を加えたところ——に意義があると思える。ヨーロッパ世界の中心からでなく周縁であるハンガリーにポランニーが誕生したからこそ生まれた発想であろう。

## B. 三つの統合体系：互酬性、再配分、交換

ポランニーは、経済の統合形態として互酬性、再配分、交換を掲げる。形式的経済学者が、交換というキー・ワードで全ての事象に接近するのに反し、彼は、経済史家として、歴史的にみて交換のみが経済の取引様態として発現したのではない、と主張する。

### i. 互酬性 (reciprocity)

互酬性は、古典的かつ現代的な主題である。トゥルンヴァルトやマリノフスキー、そしてマルセル・モースまで古典といわれながらも、1987年のポランニー学会（ブタペストにて開催）では、互酬性の再評価が取り上げられるなど、強い現代性を帯びている<sup>3)</sup>。

互酬性とは、基本的に対集団の行為である。狭義の経済学においては、個人レベルでの行為の集合として経済行為がとらえられるが、互酬性は、この種の方法では解明できない。フォーマリスタは、贈与は交換の一種であると安易な結論を導くが、これでは互酬の中の贈与にどのような集団の制度的背景が内在しているかを解き明かすものではない。互酬を実在的に探求していけば、そこにはおのずと非経済的要因——慣習、法、宗教など

に起因し、集団間を対称的に移動する姿が見えてくる。

## ii. 再配分 (redistribution)

互酬性が対称的な集団間に発現する行為に対して、再配分は、集団内の行為である。互酬が、物の水平的な移動であるのに対して、再配分は、ある集団内の物の垂直的な移動である。ある部族では、首長の下に物が集められ、再び配分される。これは垂直性とその可逆的な物の移動を示している。再配分は、互酬の一変型とも考えられるが、指揮権のある中心が存在するのは、再配分の特徴である。

## iii. 交換 (exchange)

ポランニーは交換を三種類の形態に分類した。操作的交換、確定的交換、統合的交換である<sup>4)</sup>。詳細な説明は省略するが、ポランニーは、アダム・スミス以来、人間は常に利得の極大化のために交換を行なうとする大前提の適合性を否定した。フォーマリストの思考は、未開社会や古代社会を含めた全ての社会において、人々は交換性向を持ち、その動機は自らの利益獲得のためというものである。ポランニーは、交換が単独で現われたものもなく、互酬や再配分が段階的に発展して交換に至るものではないことを示唆する。

## 2. マルセル・モース

マルセル・モースの『贈与論』<sup>5)</sup>は、何が贈与を行なわせるかを、解明したものである。フォーマリストの描く home economicus (経済人) の概念では、贈与を単なる効用の増大、減少でとらえるだけでなく、贈与をとり行なう背景は取捨される。モースは、贈与という行為とそれに伴う互酬性を体系づけて説明した点で、カール・ポランニーと共に、今日の経済人類学の礎を築いた<sup>6)</sup>。

#### A. 贈与の三つの義務：提供、受容、返礼

モースは、贈与における義務を三つに分類した。第一の義務、すなわち提供は、与え手の権威を象徴する。惜しみなく与えること（極端な場合は破壊型なポトラッチであるが）は、提供者の名誉を示現する。

第二の義務は、贈物の受容であり、贈物の受領拒否は、与え手と受け手の友好的関係の決裂を意味する。受容の義務は、二つの意味を内包する。一つは、与え手に同等なものを返礼することが不可能な場合、受容を拒否するもので、この時点で受け手の尊厳は著しく損なわれている。もう一つは、与え手との友好的関係の拒否で、戦争状態への突入を意味する。

第三の義務は、贈物の返礼である。返礼は受け手の体面の保持から生まれる行為である。後段で説明するが、贈物には、ある種の危険性が内在している。モースは、それを“物の霊” (the spirit of thing) として説明する<sup>7)</sup>。

#### B. ハウ・マナ・タオンガ

マオリ族は、贈物に霊が宿ると信じている。ハウ (hau) とは物の霊であり、マナ (mana) とはハウを循環させる魔術的、宗教的、精神的力である。タオンガ (taonga) とは受け手が贈物を受けとったまま返礼をしないと、その受け手を殺すような力を指す。この三つは、義務的循環を構成する主要な要素である<sup>8)</sup>。モースによれば、タオンガは、個人、氏族、土地と密接に結びついている。自明ではあるが、マオリ族における贈与は、純粹に経済的動機から行なっているのではなく、宗教的な聖なる土地とマオリ族の結びつきから端を発しているのである。

#### C. 「贈与論」への批判

モースの贈与論は、アニミスティックであるとの批評は、特に前述のマナ・ハウ・タオンガの説明からも、推察できる。未開社会、古代社会に限らず、現代社会においても、ある種の霊の存在は、拡大解釈して記号論的

な意味からも、否定はできないが、この種の説明だけでは、近代・現代社会を語るに十分ではないと言えよう。むしろ、このマナが単純に宗教的、呪術的意味からだけで派生したのではなく、倫理的、道徳的な要素も複合的に絡み合い、義務的な贈与がとり行なわれたと考えた方が妥当ではないか。

### 3. マーシャル・サーリンズ

#### A. モースとサーリンズの「ハウ」解釈

マルセル・モースの『贈与論』は、「いまや後代への彼みずからの贈り物となっている」が、サーリンズの『石器時代の経済学』<sup>10)</sup>も同様である。サーリンズはモースの業績に畏敬の念を持つと同時に、傑出したものの中にある曇りをすばやく看取したのである。それは、ハウについての解釈の相違の中に見られる。

第一の相違点は、モースが前述のようにマオリ族のハウを霊的なものとしてとらえ、アニミスティックに説明しようとしたのに対し、サーリンズは、「豊饒力」「生産力」としてとらえたことにある。原文においては、*excess*<sup>11)</sup>という語で説明される。これは「財産」または「役得」<sup>12)</sup>を意味し、イスラームにおける所有権に関する倫理規定と多くの共通点が見出せる。イスラームにおいては、過度の富の所有もしくは保有は、望ましくないとされる。*ribā* (利子) の禁止も、実は富の過度の保有による富の退蔵の禁止であり、時を超えて富が自己増殖的に拡大することは望ましくないとする経済倫理から生まれたものである。この意味で、程度の差はあれ「富を自分の手許におくことは非道徳的」<sup>13)</sup>とするサーリンズの説明は、ある種の妥当性を持つ。

第二の相違点は、モースがハウを、霊的なものとするのに対し、サーリンズは、霊的、物質的と区別できるものでないと主張する。続いて、サーリンズはハウを、宗教的だけでなく、経済的、政治的要素が入り込んだ不

明確なものであるとする。筆者も、サーリンズのこのハウの読みこみについては、ポランニーの経済行為の動機の解明と同じ意味で賛意を示したい。

## B. 共同寄託 (pooling)

サブスタンティビストの流れの中で、ポランニーは互酬性、再配分、交換の三つの統合体系を明らかにし、モースは互酬性に着目し、贈与における三つの義務を提示した。サーリンズは、モースから互酬性の概念を引きつぎ、三つの相互性<sup>14)</sup>——一般化された相互性、均衡のとれた相互性、否定的相互性に分類した。一般化された相互性とは惜しみなく与える供与であり、多くの場合は返礼の型が具現化しない。サーリンズは具体例として、母親の乳児への授乳をあげる。第二の相互性は、より経済的なものとして、非人格的な財の移動である交易や和平協定などが掲げられる。第三の相互性は、互定的相互性で、投機や物々交換が掲げられる<sup>15)</sup>

サーリンズは、モースの再配分 (redistribution) についても、共同寄託 (pooling) の概念を持って再規定する。語感からは、再配分の語は経済学の用語である「所得の再分配」の意味に引きずられやすいため、共同寄託とする方が、ザカートの性格規定には望ましい。共同寄託は、集団内 (within relation) の共同行為であり、互酬は、集団間 (between relation) の行為とそれに対する可逆的な反作用である<sup>16)</sup> 共同寄託を行なう集団の範囲は、家族から部族などの共同体まで広範囲に及ぶ。範囲に拘わらず共同寄託とは、集団の維持と、もしくは「共同体全体の利益」の機能を果たす。この文脈は、ザカートの社会的機能と相通ずるところがあると、筆者は考える。

換言するならば、“centricity”、“collectivity”<sup>17)</sup> で表現される物や財の動きは、真にそのままザカートの命題であるウンマ (ummah ムスリム共同体) の統一に合致する。また、サーリンズの示唆する、共同寄託の際の用役権の移動の方が、所有権の移動に比較して、威信や威厳を損ないにくいとする考察も、実はイスラームの所有権や労働、ワクフ (所有権の停止)、土地



所有の問題などへの広汎な視点を提供するものである。

### C. サブスタンティビズムのイスラーム経済への適用性

サブスタンティビズムの適用性はイスラーム経済に限定されるものではない。つまり「経済人」の設定が、常に人間が経済行動を起こす際有効かどうか、言い換えるならば、常に人間が経済合理性を追求して、行動しているのかどうか、が根源的に問われる。むろん近代経済学の有効性を全面否定するものではなく、それがあつる局面、あるモデルの設定の上で説得力を持つことは理解できる。しかし形式主義的な視点が、全ての社会に適用可能かは大いに疑問が残るところである。「狭義の経済学」としてのみ、その適用性を限定すべきであろう。

サブスタンティビスト、特にポランニーが提示した、経済をそのもののみでとらえるのではなく、社会の中に組み込まれたものとしてとらえる視点は、経済行動の非経済的動機を説明する際にも有効である。ポランニーが、アリストテレスの共同体 (Koinonia) の概念に注目しているが、<sup>18)</sup>この共同体の中に「一種の善意」(Philia) が存在し、互酬性 (Antipeonthus) として現われるとする。「包括的な共同体の成員が互いに親密性を感じれば感じるほど、時、空、その他の面で限定されたさまざまな特定の関係に関して、彼らのあいだに互酬的態度が発展する傾向がより一般的になる。<sup>19)</sup>」詳細については後段で明らかになるが、ザカートが実は時空を超え、永続的な意味で、一種のクラの環のようになることは、特筆すべきである。その背景には、富裕な者と貧者との互酬性が存在する。富裕なムスリムと貧しいムスリムとの互酬関係に、神が介在することにより富裕なムスリムと神、貧しいムスリムと神との二つの互酬関係におきかえられていることに注意したい。

贈与における互酬性の働きから、モースは三つの義務——提供、受容、返礼を提示した。彼は、贈与を「全体的給付システム」としてとらえ、何

が贈与を行なわせるか、また、贈与をされた者は何を共同体の中で要求されるかを明らかにした。

サーリンズについては、アニミズムに陥らぬように贈与における「物の霊」が何かを明らかにし、また相互性を理論的に展開させた形で、共同寄託の概念を提示した。この三者の流れは、サブスタンティビズムとして一貫性を持ち、イスラームにおける経済行為を解明する際、分析の方法として「広義」の経済活動をとらえる意味で有効性を持ち続けている。

## II. ザカート

ザカート (Zakāt) は、アラビア語の動詞 *Zakā* (成長する。心の中で純化する) からの派生語で、英訳では *almsgiving*, *alms*, *almstax*, *charity*, *wealth tax* の訳語があてられている。すでに、訳語 *almstax* の中に、フォーマリズムの萌芽が見られる。*alms* は、喜捨、布施との邦訳が妥当と思われるが、この喜捨と税の複合語で「宗教税」という形の訳語が散見される。ザカートがムスリムの義務であるというところから、徴税の持つ強制力との相似性を強調したものに他ならない。著者は、英訳としては“*almsgiving*” が適切と考える。この英訳には、ある事象をありのままに語る姿があり、訳者の先見的な解釈が感じられない。

語の意味「純化」「成長」からも明らかのように、*Zakāt* は、ムスリムが敢えて、自分の財産の一部を貧者に与えることによって、富に対する執着心を昇華させる。イスラームの神学者は、鉢木の葉を摘んで、全体の本の成長を促すように、ザカートも、各ムスリムが自分の財産を切りとることによって、財産を成長させることができると主張する。この場合、富の所有は個人のものであると同時に、ウンマのものでもある。

邦訳については、「喜捨」が一般的ではあるが、「浄財」のニュアンスも

含まれている。日本語での用法は、浄化された財つまり仏に捧げるにふさわしい清らかなものであるが、イスラームの場合の「浄財」は、ザカートを与えることによって、与え手の気持ちを純化させる意味である。

### 1. ザカートの五行における関係性

五行は、信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼を指し、ムスリムが行なうべき五つの務めである。五行を行なう各個人の営みが、総和としては社会的行為を意味することが重要である<sup>20)</sup>

礼拝 (salāt) とザカートは、強い関係性を示している。礼拝が「モスク内」で行なうムスリムの務めであるのに対し、ザカートは「モスク外」で行なう務めである。別の意味では、礼拝が身体の義務であり、ザカートは財産の義務である。

断食 (sawm) もザカートと相関関係を持つ。その関係は三つに大別される。第一は、アッラー (神) の前での辛苦の経験である。ラマダーンの月に、断食をすることは、身体の純化を意味する。同様にザカートは財産の純化である。また、断食を行なうことは、空腹の痛みを貧者と共有することであり、ザカートは一定の財産を貧者に与えることで、日頃貧者が感じている痛みを共有することにある。

第二に、ザカートも断食もウンマの統一を促す意味で重要である。困難な行をムスリム全員が同時に共有することによって、ある種の連帯感を養うものである。

第三には、ラマダーンの月には、別種のザカート (ザカート・フィットル Zakāt al-Fitr) をとり行なうのである。

信仰告白 (shahāda) とザカートにも、関係性が存在する。信仰告白は、外に内に、すなわち言明する場合と心の中の場合と、二つ行なってこそ意義がある。この内と外の二面性は、ザカートにも適合する。外面的には、実際目に見える形での行為であり、内面的には、精神的な純化の意味である。

このように、ザカートは他の五行の四要素<sup>21)</sup>と深く関係性を持ち、ザカートを単独で論ずることは、その社会的、宗教的背景を無視することになる。

## 2. ザカートの贈与者

ザカートの与え手の必要条件は、下記の通りである。

- i. ムスリムであること。
- ii. 必要最低限の資産 (nisāb)<sup>22)</sup>を保有していること。
- iii. nisāb を超える財を一年以上保有していること。
- iv. 負債を負っていないこと<sup>23)</sup>
- v. 精神異常でないこと。
- vi. 成人であること。

ザカートの対象となる富の種類は、貴金属、家畜など多岐にわたる<sup>24)</sup>

与え手の三つの義務<sup>25)</sup>

### i. 匿名性

ザカートは本来、匿名でとり行なわれるべきものである。もし、ザカートが直接、与え手 (giver) から受け手 (receiver) に渡った場合には、そこで受け手は、寄贈者に何らかの「負いめ」「義務」を感じる。実際には、与え手と受け手との間には、Zakāt officials (‘āmil) と呼ばれる官吏が介入する。この官吏は、受け手が直接負い目を感じないように機能している。

ザカートを一種の贈与と規定するならば、ザカートも贈与の持つ互酬性、ある種の危険性を内包している。事実、ザカートの受け手は、贈与の返礼を贈り手に行なうことは難しい。なぜなら、ザカートを返礼するほど裕福ではないからである。返礼が不可能である場合、贈与の受け手の尊厳は著しく損なわれるのである。このような事態を回避しているのは、Zakāt officials の存在である。贈与に伴う返礼の呪縛から受け手を解放している。受け手の名前は、Zakāt officials が知るものであり、一般のムスリムは、知る

ことができない。それ故に、受け手は贈与の負い目から解き放される。

ii. “おごりたかぶることなく”

イスラームにおいては、経済的優位性がそのまま、神の前での優位性を意味しない。富者であっても貧者であっても、神の前では平等である。ザカートの与え手が、受け手に対して感謝、称賛、尊敬などを強要するのは、与え手のおごりである。<sup>26)</sup>なぜならば、受益者の威厳を傷つけるからである。これは真に、モースが考察した、タオンガの存在に他ならない。マオリ族では贈物を受けとってそのままにしておくことは、タオンガがその受け手を殺すことを意味するからである。

この与え手の義務は、与え手に一定の<sup>たが</sup>籠<sup>は</sup>を嵌めることによって、与え手の優位性を消し去る効果を持っている。むろん、これは贈与の持つ「毒」への毒消しである。

iii. 義務としてのザカート

ガザーリーは、ザカートを義務として位置づけている。しかし、筆者は、むしろ五行の中での位置づけとして、また、サダカ (sadaqah, voluntary almsgiving) との対比でのみ、義務を強調すべきであると考え。ムスリムが義務感からのみ、ザカートを供出しているのであろうか？ むしろ、貧者と富者がウンマ (ムスリム共同体) の中で一体となって生きていく中で、ごくあたり前の行為としてザカートシステムが機能していくように思える。

ザカートが強要されたのは、ムハンマドの死後、メディナにおいて、急激な人口増加に伴う財政難により、第一代正統カリフ、アブー・バクルが、義務としての足かせを負わせたことに始まる。このことが、一種の宗教税としての定義の根拠になっている。

しかし、ザカートの義務が、どこから生じるのか問題である。モースの言葉で言うならば、「何が贈与を行なわしめるのか」である。所有権に関し

ては、ウンマにおける富は貧者と富者が共有しており、主として用益権のみが与えられている。もし、ムスリムが、富は他者によって与えられたものと措定するならば、富の保有に対して一定の罪悪感を持つはずである。それ故に、ザカートの言葉のもつ意味のように、富の保有に対するある種の罪悪感の純化、浄化である<sup>27)</sup>。このことは、利子の禁止、不労所得、また時間の経過とともに富が自己増殖することの禁止とも相通ずる。

### 3. ザカートの受領者

ザカートの受領者は、下記の8グループに大別される<sup>28)</sup>

- i. 貧者 (faqīr)
- ii. 生活困窮者 (miskīn)
- iii. ザカートを取り扱う官吏 ('āmil)
- iv. イスラームに改宗した者 (al-ma'lafah qulūbahum)
- v. 捕虜、奴隷 (riqāb)
- vi. 債務者 (ghārim)
- vii. ジハード (jihād) を行なう者 (fī sabīlillāh)
- viii. 旅人 (ibn al-sabīl)

各グループについて、説明を行なう。

- i. 貧者は、不具の者、孤児など、財産がなく、日々の生活の糧を稼ぐことのできない者である。
- ii. 生活困窮者は、ガザリーによれば、1,000ディルハム以下の財産所有者である。
- iii. ザカートの収受に関わる人々は、アッラーの道に働く人として、ザカートを与えられる。
- iv. はさらに3つに分類できる。

ア. ザカートによって改宗が期待できる者。むしろ、これは贈与による

積極的な改宗を狙ったものである。

イ. 改宗したものの、依然として気持ちの揺らいでいる者。

ウ. イスラームへの改宗の見込みのある者。

これら3つは、贈与の持つ性格——互酬性による集団への帰属性を狙ったものである。

vii. Jihādは、しばしば聖戦の意味で用いられるが、この場合、神の道に努力する人、戦士を意味する。

viii. イブン・バットーウタが、30年間エジプトから中国、マレーシア、アフリカまで旅行できたのも、ザカートに負うところが大きである。この場合、ザカートが地域共同体というよりも、ウンマの中で施行されたと、考えるべきである。

#### 4. 受領者の2つの義務<sup>29)</sup>

##### i. “神の裁定を知れ”

この義務の本質は、ザカート受領者が二つの意味で、重圧から解放されることになる。受領者もしくは貧者は、ザカートを受け取る以前に、貧者としての重荷を負っている。また、ザカートを受領した後も、現実的には、与え手へザカートを返却することは困難であり、そこに一種の「負い目」を負うのである。

それ故に、神の裁定とすることにより、返礼できないことによる呪縛から解放するのである。これは贈与における与え手と受け手の相互性を、神の介在により、神と与え手、神と受け手の二つの関係に置き換えることを意味する。現実面では、与え手と受け手の間に、Zakāt officials が介在することになる。

ii. “神に感謝せよ”

第二の義務も、第一の義務と深く関連している。ザカートの受け手が、返礼不可能であり、受領者は与え手に負い目を感じる。それが、感謝の言葉であり、与え手の命令することには従わなければならないような、贈与における従属関係を創り出すことになる。いうまでもなく、貧富に拘わらず、アッラーの前ではムスリムは平等である。この義務も贈与のもたらしす示威性——返礼の贈物を行なうか、行なえない場合には負い目を感じる——を回避するために、与え手と受け手が直接に相互性を働かせるのではなく、神の介在によって、その示威性を柔らげようとしている、と考えられる。

### III. 新たなザカート理解

経済を社会から離床してとらえようとする姿勢は、フォーマリストの特徴である。彼らは、西洋における所得税と、イスラームにおけるザカートの共通点を強調する。この思考法は、19世紀に誕生した市場経済の汎用性に対する全幅の信頼から派生している。

それに対し、サブスタンティビストは経済を再度、社会に埋め直し、経済行動の背景を解明しようと試みる。ザカートについても、社会の中でザカートを還流させる真の力を解明するといえよう。本項では、対比のために、フォーマリストのザカート理解を掲げ、その後、筆者のザカート解釈を提示したい。

#### 1. フォーマリストの見解

フォーマリストは、ザカートの経済効果として主に下記の三つを掲げる。

i. 投資促進



ii. 資源の有効活用

iii. 所得の再分配

いうまでもなく、これは租税における資源の再配分とする近代経済学のフレームワークで語られるものに他ならない。イスラーム経済を、マーケットアプローチによって語っても、そこにはザカートと税との相似性を強調する姿があり、この相似性の原型も、あくまで西洋における租税であるとする、西洋的な一種の奢りである。従って、ザカートの性格であるウンマにおける共同寄託を、この三つの経済効果から浮かび上がらせることはできない。

## 2. サブスタンティビストの見方

サブスタンティビストは、まず経済を社会に再び埋め戻す(re-embed)ことから始める。ポランニーは、“economic”が“economical”と“economizing”の二つの意味をもつことに着目する。そしてフォーマリストは、“economizing”のみを強調して、真の経済行動——経済的および非経済的な制度に埋めこまれた人間の経済に分析を行なうのである。イスラーム経済を論ずる際も、サブスタンティビストのこの視点は、イスラーム的倫理観を無視しない意味で重要である。

ザカートを論ずる際に重要なことは、与え手(贈与者)の義務がどこから生じてくるかということである。フォーマリストが、ザカートは税であると断定する一つの論拠に、強制力、義務がある。著者も、正統四代カリフの時代、爆発的な人口の増大に伴ないザカートの収受が困難になり強制力を伴って、ザカートを集めた事実を否定はしない。今日では、サウジアラビアでのザカートの取り扱いも、国家の予算に組み込まれている。しかし考慮すべきことは、ザカートの義務がどこから生じてくるのかである。前半でも述べたが、ザカートは五行の一つである。ムスリムの教義として、ムスリムが仕方なくそれに従っているのか、または積極的に、神とムスリ

ムとの関係をつくりだしているのか。著者は、後者であると考え。ザカートの履行は、義務というよりは、ごく自然に行なわれるのではないだろうか。言うなれば、ムスリムならば、当たり前のこととして受けとめられていると考えられる。

実務でも、自己申告制度であり、徴税のように強制力、罰則の伴うものではない。ムスリム自身の捉え方も、積極的に自分を浄化しようとする気持ちの現われでもある。

税と国家がセットで語られるように、ザカートはウンマと一対で語られるべきである。ムスリム社会の中にも、非ムスリムは居住しているが、ザカートはムスリムのみ課せられるものである。それ故に国家レベルでの課税と等視してしまうのは望ましくない。ザカートとは、ムスリムの行である。理念としては、ガザーリーが主張するように、地域共同体の中で履行されるべきである。例えば、A村で集められたザカートは、A村の中で配分されるべきものである。しかしながら、ムスリムがザカートを支払う際、単に地域共同体のみを意識しているのではない。この地域共同体はウンマの micro cosmos として考えられる。ザカートは、ウンマの中でムスリムの兄弟愛を育み、ウンマの統一と拡大に寄与するのである。むしろ、この際ムスリムの中で国家といった概念は希薄であると言えよう。

### 3. ザカートの新解釈——贈与論的展開

本段では、ザカートの新解釈として、いくつかの key concept を提示する。前半での贈与論の方法論的展開と後半のザカートの特性を結びつけるものである。

#### A. 互酬性

##### i. 与え手と神

ザカートはムスリムの神への感謝が具現化したものと考えられる。イス

ラームの教義によれば、ザカートを与える際、与え手は、通常見返りを期待してはいけなさとされている。このことは、受け手は贈与の返礼をできずに、そこに一種の負い目を負うからである。しかし、これを、神と贈与者の関係でとらえてみるならば、ザカートの贈与者は、神（アッラー）に対して、一年間の返礼の意味を込めてザカートを支払っているとすべきではないか。その意味では、ムスリムの神への感謝と考えられる。また、積極的な贈与と考えるならば、来世への期待を、具現化したものである。

サーリンズが、未開社会では「財を保有することが不道德である<sup>30)</sup>」と規定している。イスラームにおける利子の禁止も、富や財の退蔵の禁止に依拠している。また、イスラーム社会にとっては、所有権は最終的にはウンマにあり、理論的には、用役権を与えられているに過ぎないのである。富や財の保有を、ムスリムは貧者と共にウンマの中で共用しているという意識が強い。ザカートを支払う時の意識は、富を保有することに対する一種の負い目、モースの言葉を借りるならば、贈与者を殺しめるタオンガをとり払うものである。

## ii. 受け手と神

charity も贈与であることは、注目すべき点である。ザカートも、それ故に贈与の危険性から逃げることはできない。ザカート（ここでは、サダカと区別するために、義務的贈与とする）は、与え手から受け手へ直接移動しない。イスラームの教義では、ザカートの受け手は、神に感謝すべきであるとする。このことは、受け手が感じる贈与の返礼の呪縛から、受け手を解放するものである。実際には、ザカートの与え手と受け手の間に、Zakat officials が介在しているからである。受け手は、与え手に返礼の義務や負い目を感じるのではなく、ただ神への感謝を行なえばよいのである。

### iii. サダカ

アラビア語の sadaqah の原義は、「真実を伝えること」「約束を実現すること」となる。また派生語の sidq も、信頼、親愛といった意味を持つ。通常サダカは、自発的な喜捨として、ザカートと区別される。著者がここで強調したい点は、与え手と受け手の関係から、ザカートは神への感謝と来世への期待と考えられるが、サダカは、ザカートより強い見返りの期待と考えられる点である。

サダカについては、ザカートが一年間の資産の2.5%という規約があるのに対し、何も決まっていない。ガザーリーは、サダカについて、匿名制と公表制の各々の長所を、それぞれ5つ掲げている。

匿名制については、

- i. サダカを受領者の素姓を公表する必要がない。
- ii. 本当に必要な人に与えることが可能になる。
- iii. 善行を助長できる。
- iv. 受け手が公衆の前で恥をかくことがない。
- v. 与え手の同席を必要としない。

また、公表制については、

- i. 周知で行なうことにより、偽善を防止する。
- ii. 与え手の虚栄心を消し去る。
- iii. 神を強く意識できる。
- iv. 受け手に感謝の義務を意識させる。
- v. 神への感謝を助長する。

を提示した。明らかにガザーリー自身も、サダカの取り扱いについて混乱がみられる。サダカ理解の鍵は、受け手の尊厳と、与え手の返礼の期待である。ザカートとの比較で考えるならば、サダカの方が、与え手と受け手の互酬性が直截に働く。与え手は、返礼や感謝を期待し、与え手の尊厳を容易に傷つける。このことが、ザカートの方がサダカより望ましいとされ

るゆえんである。

## B. 共同寄託

共同寄託の概念も、ザカートの一側面を語る重要なものである。互酬性が、集団間で水平的な動きをするのに対し、共同寄託は集団内で垂直的な動きをする。特に首長制との結びつきを、サーリンズは強調している。集団間の中心である首長を、神に置き換えてみるとザカートの動きがよく理解される。

前段で述べたように、ザカートの与え手と神、ザカートの受け手の互酬性が存在する。また、ザカートの流れに目を転じると、与え手から神へ、そして神から受け手へと、ムスリムの集団内の垂直的な流れとなる。互酬性と再配分は区別して考えられるべきで、特にその流れは互酬性が双方向であるのに対し、共同寄託は単一方向である<sup>31)</sup>

共同寄託の持つ側面、集団性および中心性は、真にウンマの概念に適合する。ザカートがウンマの拡大と統一に寄与しているのである。もう一つの側面は、匿名性である。ザカートの匿名性は、受領者が負い目を感じることはないシステムである。もし、ザカートが贈与の危険性をもって、与え手と受け手（貧者）との間に、贈与における束縛として存在するのならば、ザカートの持つ集団性は、失なわれるであろう。むしろ、ザカートの贈与の力が正の方向で、ムスリムの兄弟愛や同胞愛を助長し、ウンマの拡大と統一に貢献していると見なくてはならない。

## C. 循環 (circulation)

循環という語に、筆者は、二つの意味を持たせている。一つは、富の循環、もう一つは、時の循環である。前者は一種のクラ (kula) の環である。クラとはトロブリアンド諸島に見られる交換をつなげる大きなものの流れである。あるものは、時計の針と同じ方向に動き、またあるものは反対の

方向に循環する。このクラの環は経済的な意味と儀礼的な意味の両方を持つものである。ある財がある特定の人のところに溜まることを嫌うのである。程度の差こそあれ、ムスリムも富が自己増殖する形での財の滞留を望ましくないとする。

時の循環は、ムスリムの時の概念から派生する。今日の貧者は明日の富者たりうると考えることは、ムスリムにとってごく当たり前のことである。つまり、時を超えて、ザカートの与え手は受け手となりうるし、また、受け手も与え手となりうる。ウンマの中で、時を超えムスリムのザカートの環が継がるのである。また現世と来世で考えるならば、現世でのザカートの与え手は来世で報償という形で「お返し」を受けるわけで、時を超えザカートはクラのような環の中で循環する。

#### D. 共同体の富

ザカートは、ウンマへの基金として位置づけられる。まず最初に ummah の語の意味を明らかにしたい。ummah は、「母」「起源」「礎」などの意味を持っている umm から派生している。ummah は「人々」「国家」などの意味を持つが、通常 nation state ではなく、むしろ「共同体」といった概念で用いられる。

イスラームにおける所有権が、ウンマ第一に考えられることに対し、西洋においては、個人が第一に考えられる。その根底には、個人が利益を極大化させることが、総和としての国家の利益を増大させるという「経済人」の前提が存在するからである。すでに、再三再四、本論文で触れたように、ザカートとウンマは密接に結びついている。ザカートを考察する際には、ウンマを抜きでは語れないのである。

ムスリムは、ウンマの中でどのように位置づけられるか。ムスリムは神の前で自由と責任を持つ。ただし、ウンマを傷つける形での自由は認められない。それ故、経済活動といえどもウンマと密接に結びついており、ポ

ランニーの主張するように、経済を社会から離床させて捉えることは、イスラームでの実態とかけ離れてしまうのである。

ウンマは「均衡」と「統一」という二つの目標を志向する。第一の「均衡」とは「富の均衡化」であり、ウンマの社会的調和に貢献する。これは「水平的均衡」を意味する。第二の「統一」は、ザカートの再配分における中心性への動きに呼応する。「垂直的均衡」として、ウンマの中心にムスリムを吸収する。ザカートは、ウンマの基金として再配分され、ウンマの統一に貢献する。経済的、社会的、宗教的な要素は、全て一化の精神(Tawhid)によってウンマの統一に向かうのである<sup>32)</sup>。

## 結 び

ザカートは、ウンマ（ムスリム共同体）の概念なしに規定することは不可能である。ザカートは、一定の財産を持った人から貧しい人への富の移動ではあるが、同時にムスリム共同体の統一と拡大を促す。ガザリーが主張するように、ザカートは、地域共同体内で再配分されるのが望ましいとされているが、ムスリムがザカートを支払う際には、むしろ、ウンマを意識している。その場合に地域共同体はウンマの micro cosmos と位置付けられる。いうまでもなく、彼らは同時にタウヒード（一化の原理）も意識している。

ザカートの相互扶助性は、ムスリムの持つ時間の概念とも密接に関連も持つ。「今日の貧乏人が明日はお金持ちに」、またその逆も、容認される思考である。ザカートの持つ環は、時を超えて、あたかもクラのようにつながる可能性を秘めている。また、ザカートは、互酬性や共同寄託の性格を持ち、community fundとしての役割を果たしている。この community fund は、貧者への救済を行なうことによってムスリムの連帯感を養い、ウンマ

の統一と拡大に寄与しているのである。

以上の考察は、いわゆる近代経済学の枠組みではだしえないものである。貧者への喜捨を、その本質的特徴に従って、「贈与」と規定したことに、意義が認められるのではないか。サブスタンティブなアプローチは、イスラーム経済への試論として新たな地平を描き出しえると、確信する。

注

- 1) E. サイドいうところの「オリエンタリズム」。エドワード・W・サイド、板垣雄三、杉田英明監修、今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社、1986年、参照。
- 2) 野口建彦「市場社会を超えて」『中東フォーラム・Maydan』第12号、1頁。
- 3) トロント大学、丸山真人氏の御教示による。
- 4) カール・ポランニー、玉野井芳郎編訳『経済の文明史』日本経済新聞社、1975年、274-275頁。
- 5) Marcel Mauss, *The Gift*, Toronto, W.W.North, 1967. 邦訳として有地亨他訳『社会学と人類学 I』弘文社、1973年がある。
- 6) モース自身は、経済人類学の始祖たることを意識していなかったが、従来型の経済学における交換の概念の適用性については、大いに疑問を呈していた。
- 7) モースの説明がアニミスティックであるとの批判は表面的には的を得ている。しかし、贈与の危険性を語る際に、深層的なレベルである種の妥当性を持っていることも事実である。
- 8) Maori. ニュージーランドの原住民の総称。ホリネシア系に属する。
- 9) モース、前出、240頁。
- 10) Marshall Sahlins, *Stone Age Economics*, London, Tavistock Publications, 1974, p.149. 邦訳は、山内稔訳『石器時代の経済学』法政大学出版局、1984年、175頁。
- 11) 同上、162頁。
- 12) 同上、192頁。
- 13) Sahlins, *op.cit.*, p.162.
- 14) reciprocity の訳語については訳者山内稔氏の意図に準拠し、「互酬性」とせず、サーリンズに関連するものは「相互性」とした。この三つの分類は、相互性の範囲を示すものとして価値がある。ただ効用を用いた説明が、近代経済学の枠組の中にとどまっているのは惜しい。



- 15) Sahlins, *op.cit.*, p.189.
- 16) サーリンズ、前出、227頁。
- 17) Sahlins, *op.cit.*, p.189.
- 18) ポランニー、前出、272頁。
- 19) 同上、272-273頁。
- 20) 黒田壽郎編『イスラーム辞典』東京堂、1983年5頁。
- 21) 巡礼については、能力がある場合にのみ行なったほうがよい務めであり、他の三要素ほど関係性はない。
- 22) 金については、200 dirhams が nisāb として決められている。
- 23) 原則的に、負債分と保有分を相殺して、niṣābを保有すれば、zakātを支払う義務がある。
- 24) 詳細については、G.de Zayas Farishta, *The Laws and Philosophy of Zakat*, Damascus, Al-Jadidah Printing Press, 1960.を参照。
- 25) 基本的な枠組は、Abu Hamid Muhammad Ghazali, N.A.Faris tr., *On the Mysteries of Almsgiving*, Beirut, The Heidrbeg Press, 1966, による。
- 26) *Ibid.*, p.37.
- 27) 富の保有がすなわち罪悪ということではなく、むしろ貧者と富者が、共同体の富を共有しているという観点からである。
- 28) Yūsuf al-Qardāwī, *Fiqh al-Zakāh*, Beirut, Mu'assasah al-Risalah, 1985 (15th print), pp.544-744.
- 29) ガザーリーは、他に「ザカートの源を知れ」「ザカートを必要以上に貰いすぎてはいけない」という二つの義務も提示している。
- 30) Sahlins, *op.cit.*, p.162.
- 31) 野口建彦氏も指摘しているように、共同寄託（再配分）には、指揮の中心があり、互酬性にはないことも特筆すべきことである。
- 32) Nawab Naqvi Haider, *Ethics and Economics*, London, The Islamic Foundation, 1981, p.46.

## The New Interpretation: *Zakāt* in Gift-Giving

by Hideki SATO

Analysis of the Islamic economy is usually done in a narrow sense ignoring the relationship between the Islamic economy and the Islamic society. Because of this narrow focus, formalistic interpretations are often misleading. For example, formalists often stress such aspects as the prohibition of *Ribā* (usury) as being representative of the Islamic economy. In addition, they attempt to argue that *Zakāt* in Islam is just one kind of tax because they tend to stress the obligatory sense of *Zakāt* and to overlook its real social and spiritual function in the society.

*Zakāt* can be analyzed through the concept of gift-giving. Gift-giving is an eternal theme. People look forward to receiving gifts, although they often forget that receiving a gift entails an obligation to repay it. Although Marcel Mauss touched on alms givings as gift-giving, most scholars have yet to analyze the phenomenon of *Zakāt* in terms of gift-giving. Formalism tries to adopt a market economy approach which stresses a means-end relationship in all economies. Within this approach, *Zakāt* is seen as only a religious wealth tax and the substance of gift-giving is ignored. However, from the perspective of substantivism, which tries to empirically analyze the human economy as an interchange between the social environment and men, *Zakāt* can be considered as a variation of a gift and analyzed from this perspective. Thus, this study will attempt to apply the substantivist view to *Zakāt*.

This study will attempt to demonstrate that *Zakāt*, when analyzed from a substantive perspective, should be considered as a gift. This is in contrast to the formalistic approach in which *Zakāt* is considered merely a religious and/or income tax serving merely as a mechanism for the redistribution of income. Nevertheless, the real importance of *Zakāt* is as a gift from the main body of Muslim believers to the poor, which works as a community fund. Specifically, the purpose of the community fund in Islam is to promote unity in the *Ummah* (Muslim world) and enlargement of the *Ummah*.

This dissertation is composed of two parts. The first part examines three substantive approaches of economic analysis by Karl Polanyi, Marcel Mauss and Marshall Sahlins. The second part discusses the main features of *Zakāt*, and applies the substantive perspective to the analysis of *Zakāt*, with particular focus on the concept of reciprocity in gift-giving, a key concept for the understanding of *Zakāt*.

Using the concept of reciprocity in gift-giving, *Zakāt* can be characterized as a community fund, the function of which is to pool and circulate money. This notion of *Zakāt* as a gift can only be understood from the substantivist view. The substantivists have analyzed human economic activity as being motivated not only by economic considerations, but also by non-economic considerations. More specifically, *Zakāt* is characterized as being mainly motivated by interwoven social, spiritual and religious factors.

This analysis of *Zakāt* demonstrates the value of the substantivist approach in providing a clear understanding of the working of the Islamic economy. Furthermore, it strongly suggests that future research into other aspects of the Islamic economy and culture would greatly benefit from the use of this approach.